



斎藤宗次郎 90歳

「雨ニモマケズ」 のモデルになった人 Part 2



見送る人々の中に、宮沢賢治の姿もありました。

宗次郎が東京に着いてから最初に手紙をくれたのは賢治でした。その5年後賢治は「雨ニモマケズ」の詩を書きました。この詩は「みんなにでくのぼうと呼ばれ、ほめられもせず、苦にもされず---

そういう者に私はなりたい」という言葉で締めくくられています。宮沢賢治は、斎藤宗次郎という人の生き方に接し、深い共感を覚えてこの詩を書いたのではないのでしょうか。

前回に続いて、宮沢賢治の詩「雨ニモマケズ」のモデルになったと言われている斎藤宗次郎の話です。

斎藤宗次郎の新聞配達の方法はとても変わっていました。重い新聞紙を抱え、十歩進んでは神に感謝をささげ、さらに十歩進んでは神を賛美するという調子でした。ポケットにはあめ玉をたくさん入れていて、子供たちに会うとあめ玉をあげる。病気の人がいると、その病床まで行って慰め、小銭を置いてまた配達に戻る。そのようにして花巻の町全体を毎日走り回ったのです。

宗次郎と宮沢賢治は一緒にクラシック音楽を聴いたり、文学の話をする密接な関係でした。宗次郎のこのような生き方が賢治に目にはどのように映っていたのでしょうか？

やがて1926年(大正15年)、宗次郎は住み慣れた故郷花巻を離れ、東京に移る日がやって来ました。「だれも見送りに来てくれないだろう」と思って駅に行きました。

ところが、そこには名残を惜しむ見送りの町の人々があふれていたのです。お寺の大勢の和尚さんや学校の先生たちも来ていました。昔は迫害した人々も今はすっかり尊敬と親愛の情に満ちた顔で見送りに来てくれたのです。宗次郎がふだんからしてくれていたことを、彼らは見ていたのです。そして感謝を表しに来ていたのです。身動きできないほど多くの人々が集まったのです。